ガル・ルトネ（ghar lutne）：家財の略奪
—ネパール・マオイストによる地方名望家への襲撃—

The Looting of Political Leaders' Property by Maoist Rebels in Rural Nepal

安野早己
Hayami Yasuno

1．ビスタピット（国内避難民）になった地方名望家

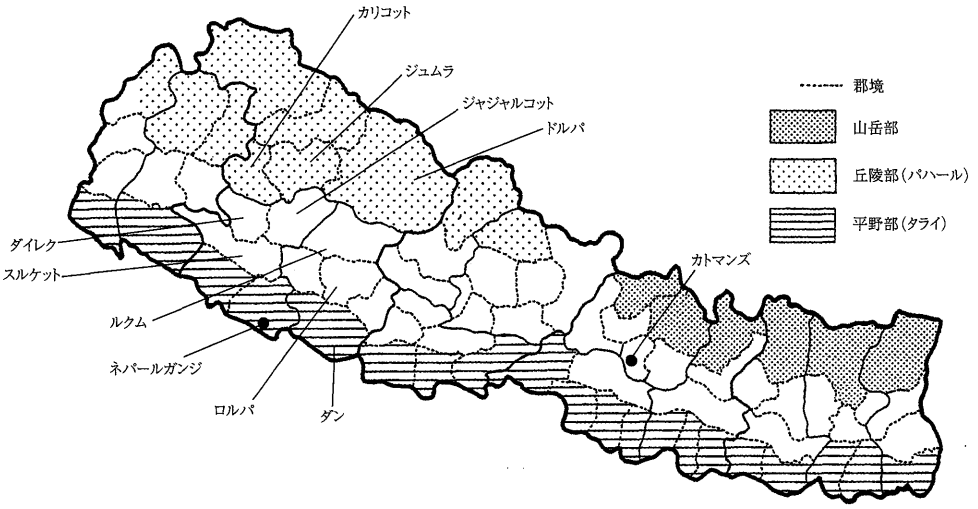
2006年の夏，私は久しぶりに，かつてフィールドで世話になった人々に再会することができた。私が西ネパール・ジュムラで人類学的調査を行った最後の年は1992年であるから14年ぶりになる。ネパールでは1996年２月に，毛沢東主義を掲げる勢力（ネパール共産党毛沢東主義派，以後マオイストと表記する）によって人民戦争が勃発し，以後治安上，外国人が首都カトマンズから遠く離れた地を訪ねることは不可能であった。もっともBS2052年（1996年）ファグン月１日（２月13日）に，ロルパのホレリという場所で，警察署や政府の建物への襲撃が行われ，それがマオイストによるものであり，人民戦争の幕開けとなったということはのちに伝えられるようになったことで，当時は報道されることもなかったし，政府を含めネパール人の大半は知ることもなかった。

懐かしい人々に会えたのはジュムラでではない。会った場所は，これらの人々が故郷を去ってビスタピット（国内避難民）[1]となって，暮らしているダンやネパールガンジである（図１参照）。彼らは身の危険に晒され，家を捨て，まずは当該地域の行政の中心地（郡庁所在地，HQと略称される）に移り，ついで上述のタライの都市や首都カトマンズへと移り住んだのである。この間ほとんどのひとが自分の村へ戻ってはいない。

家財を襲撃されることをネパール語でガル・ルトネ（ghar lutne）という。夜，マオイスト武装勢力がやってきて，銃で脅し，財産を奪っていく…。このような災難が，西ネパールの村落に住む名望家たち—比較的裕福な上位カースト出身者で，教育を受けており，周囲の人々に影響力をもつ—のうえに頻発したのは，1998—1999年頃のことである。被害者の多くは，1990年の民主化以降，公に政党活動に参加した，ネパール・コングレス党（NC），統一マルクス・レーニン主義党（UML），ラストリヤ・プラジャタントラ党（RPP）などの党員でなんらかの地方政治の役職についていた人々である。

政党員が地方政治の役職につくようになったのは，1990年民主化によってもたらされた自由な選挙による。地方政治においては1992年制定の地方自治法[2]によっ

図１　ネパール略図



大学院国際文化学研究科教授 Graduate School of International Studies

て，地方代表の選出方法が制限選挙から普通選挙に変えられた。以前のパンチャヤット制度と変わって，政党活動の自由が保障され，地域のリーダー（ネタ：政治家）たちは，ポストの数[3]に見合う候補者を確保するために，自分の所属する政党のメンバー増大をはかり，一方でポストをめぐって対立政党と争い，ときに暴力沙汰になるほど活動が過熱するともあった。1992年5月に第一回の地方選挙が，5年後の1997年に第二回の地方選挙が行われた。大雑把に見れば，第一回の結果は当時の与党NCが優勢であり，第二回ではそれを批判するUMLがやや優勢となった（表1参照）。しかしながら，2002年7月に各ポストの任期が切れても，マオイスト人民戦争の混乱ゆえに，第三回の地方選挙は行われず，空席のまま放置された。2006年2月，ギャレンドラ国王によって一部地方選挙（具体的には後述する市のレベルのみ）が強行されたが，批判する声が多く，その投票率は非常に低いものであった。

表1　ジュムラのあるVDCの選挙結果

	1992年	1997年
委員長	NC	UML
副委員長	NC	NC
委員1区	NMKP※	NC
委員2区	NC	NMKP
委員3区	NC	NC
委員4区	NC	UML
委員5区	UML	UML
委員6区	UML	NC
委員7区	NC	NC
委員8区	NC	RPP
委員9区	NC	UML

※NMKPはネパール労働者農民党の略

地方政治の単位は，パンチャヤット時代と同様，人口規模によって郡（jilla：district）・市（municipality）・村（gaun：village）の三種類がある。かつての県（anchal：zone）と県知事（anchaladesh）は廃止された。郡のレベルで中央政府を代表するのは，CDO（Chief District Officer）で，警察などを含む行政をつかさどり，中央から派遣される官僚である（Pant 1997参照）。一方，1992年に施行された地方自治法によって，郡・市・村に決議・執行機関として開発委員会（Development Committee）が設置され，地方開発の方針決定と開発推進の役割が課されている。地方自治は二つのレベルで構成される。まず基盤となるのは村落開発委員会（VDC）で，通常九つの区（ward）から成り，委員長，副委員長は村内の有権者（18歳以上）による直接選挙で選出される。委員は各区ごとに一名ずつ選ばれる[4]ので，ひとつのVDCには9名の委員がいる。委員資格は，ネパール国民で25歳以上，当該地に最低1年以上居住し，法的資格剥奪処分を受けたことがない者とされる。次いで，上位レベルに郡開発委員会（DDC）が位置する。委員長，副委員長，委員で構成され，郡内の村落開発委員会ならびに市開発委員会から互選で選ばれる。つまり，直接選挙ではなく，間接選挙で選ばれる。任期はともに5年である。

VDCやDDCには，上記の選出された委員とは別に，事務官が存在する。これは中央政府・地方開発省から派遣され，中央政府との連絡，開発委員会の業務処理，技術的業務を遂行する。

上述のように2002年に任期が切れても地方選挙は実施されず，地方政治は空白状態になった。この間の事情をArjun Karki と David Seddon（2003）は次のように描写している。「7月中旬で郡ならびに村のレベルで選出された地方政体の現代表たちは，任期が切れたが，任期の延長の可能性は排除され，彼らはポストを去らねばならなかった。DDCとVDCとは正式に解体された。郡レベルでの地方政体の責任は，CDOとLDO（Local Development Officerの略）ーそれぞれ内務省と地方政府によって指名され，内務省と地方政府に対して責任をもつーに引き継がれた。…村レベルでは，ひとりの指名された村の書記（セクレタリー）によって助けられた。ネパールには現在選出された政府はない，どのレベルにおいても，国家，郡，村のどのレベルにおいても」（Arjun Karki & David Seddon　2003:45）。さらに地方の無政府状態は深刻化し，2006年7月現在の国連高等難民弁務官事務所のレポートによれば，選ばれた委員長や委員どころか事務官も不在のVDCが68%にのぼる。

マオイストの方針は，政治的プロパガンダとともに，武力で村落から中央政府の権力を追い払い，かわって「人民委員会」を作って自らの統治をめざすというものであった。人民戦争初期の戦略について，党首プラチャンダはRIMのジャーナリスト，リ・オネストとのインタヴューで次のように語っている。（文中，プラチャンダをプラ，リ・オネストをオネと略記する。）インタヴューは2000年2月Revolutionary Workerに掲載された。

プラ：　あなたは人民の力について訊ねたが，西部地方[5]では人民戦争開始後1年に力の真空状態が

生まれた。その時点で，我々は組織的な方法で力を行使できる立場にはなかった。

オネ：　政府のようにVDC委員長たちは逃げてしまったが，警察はまだ力をもっていたということか。

プラ：　ええ，警察はまだ強かった。VDC委員長は誰も仕事をしていなかった。が，警察詰め所はまだあった。これが人民戦争開始後1年の特殊な状況であった。2年後，力の問題が火急の問題となった。それはアジェンダとなった。力の行使の問題を研究し始めた。どのようなレベルで人民の力の行使を組織するかを議論した。そして，2年，2年半後に，核となる地方で，主に西部地方で，地方の警察を打ち負した。警察官は，地方で村のなかへ行くことを辞めた。彼らは事務所，詰め所に留まっていた。ときには警察はオフィスの外で眠っていた。蝋燭かランターンを詰め所のなかに灯して，マオイストが攻撃してくると，彼らは外へ出て森へ隠れた。こんなことは何百という警察詰め所で起こっていた事柄だ。我々のスカッド（分隊）[6]は重要な待ち伏せと重要な攻撃とを実行するのに成功し，警察を恐怖に陥れた。警察は敗北を被った。その時点において，村には，VDCも警察もいなくなった。　[Dahal 2003:97-98]

人民戦争自体はいくつかの段階を設けて行われ，1998年頃には，第三次計画が進行中であった。「ゲリラ戦を新しい高さに高める」というのが第三次計画のスローガンで，1997年7月から1998年10月まで続いた。7月にはスカッドの上位にプラトーン（小隊）を結成した。この計画はベースエリア建設への移行的な段階であった。ベースエリアは，政府に対するストライキ実施の根拠地として使われる予定であった。この段階でマオイストは地方人民委員会を，のちに人民政府を形成して，VDCの機能に取って代わろうとした。VDCは地方選挙のボイコットか，選出された委員が辞職を余儀なくされて，村には存在していなかった[Thapa 2003: 101]。コイララ首相率いるキロ・セラ2作戦の実施によって打撃を受けたマオイストは，ベース・エリア，カンパニー（中隊）を結成し，警察詰め所を攻撃した。すると，政府は詰め所を閉鎖して，警察官を郡庁所在地にひきあげさせた。

当時，人民戦争が浸透してきた農村地帯では，強壮な男女はジャングルへ行きマオイストになるか，残りは仕事を探しに町へ行くといったあり様だった。マオイストは障壁を作り上げて完全に支配し，他の政党，すなわちNC，CPN（UML），CPN（ML），Mashalなどの政治活動は，禁止された。マオイストは，そのヘゲモニーが失われると考えて，彼らの支配する地域では，他者が政治活動に従事することを許さなかったのである。

この頃とりわけ与党NCの支持者が，マオイストの暴力のターゲットとなったのは，「彼らとマオイストとの伝統的な敵対関係に加え，警察に協力してマオイストならびにその支持者に嫌がらせをするからであった」[Banerjee 2005:248]。カトマンズのマオイスト被害者協会の事務局によると，当時この協会に登録していた900人のうちの90パーセントがNCであったという。与党のみならず，警察の家族，大土地所有者などは村に住めなくなり，警察署や軍の兵舎がある郡庁所在地やタライに避難した。

「村々から警察と行政を追い払うことが，マオイスト運動にとって一大戦略的成果であった。その防衛を固め，さまざまな敗北に反撃するために，政府は警察署を合併させ始めた。この動きの不幸な帰結は，警察署は実際のところ，マオイストからの攻撃を受けて立てないほどに弱体化した。ロルパ地方は，警察の力が弱まった好例である。警察署の数は，かつての39から二つに縮小された。同様にルクムは23からふたつに減少した」[Sharma 2004:44]。一方郡庁所在地は，避難民の逃げ場所となり，一種の自由区を形成するようになる。

私がかつて人類学的調査を行ったジュムラは，ロルパ，ルクムの西に位置する。毛沢東にならって「地方から都市を包囲する」という方針のもと，1996年にマオイストによるロルパ，ルクムでの警察詰め所への襲撃というかたちで始まった武装闘争が，その後どのように浸透してきたかを，ジュムラ，L村出身でネパール・コングレス党の，もとVDC委員長は次のように語る。（この語りは，やや断片的で，必ずしも出来事の生起した順番にもとづいて語られているわけではない。表2参照）。

（人民戦争は）BS2052年（1996年）に始まり（ということを現在は理解しているが，当時は何が起こったか知る由もなかった），ジュムラではBS2054（1998年）年頃には，少しずつ，慌ただしい動きが見えるようになった。マオイストたちは，はじめ外部にわからぬように，一警察詰め所（チョウキ）があるのでー，隠れて活動していた。BS2056年には警察詰め

表2　人民戦争略年表

1996年2月13日	人民戦争の開始
2000年10月25日	ドゥナイ　ドルパ攻撃 DHQへの最初の攻撃
12月	ルクムで郡レベルの最初の人民政府樹立。
2001年6月1日	王宮暗殺事件　4日ギャネンドラが新国王に即位。
2001年7月23日	デウバ首相による停戦宣言、マオイストも応じる。勢力拡大。
2001年8月30日	円卓会議
2001年11月23日	停戦破棄
2001年11月23日	サレリ、ソルクンブー攻撃
2001年11月23日	ゴラヒ、ダン攻撃
2001年11月23日	シャンジャ　バザール、シャンジャ攻撃
2001年11月26日	国家非常事態宣言　マオイストはテロリストとされる。 マオイスト帰蕩のため、初めて国軍を展開
2002年2月23日	マンガルセン、アッチャム攻撃
2002年5月22日	下院の解散　この後4年間下院不在
2002年8月28日	国家非常事態の終焉
2002年9月8日	ビマン，シンドゥリ攻撃
2002年9月9日	サンディカルカ，アルガカンチ攻撃
2002年10日4日	国王　デウバ首相罷免、直接統治開始。
2002年10月14日	マオイスト、ジュムラのカランガ攻撃
2003年1月30日	マオイストと政府が停戦を宣言
2003年3月14日	政府とマオイストとの間で22ポイントの合意
2003年3月28日	マオイストのリーダー、カトマンズに現れる
2003年4月27日	円卓会議開始
2003年5月30日	ロケンドラ・バハドール・チャン首相辞任
2003年6月4日	スルヤ・バハドール・タパ首相
2003年8月17日	ネパールガンジで円卓会議　立憲議会召集へ不同意
2003年8月29日	27日に和平交渉決裂し、マオイスト停戦破棄
2004年1月	全国に八つの自治区人民政府を樹立
2004年3月20日	ミャグディ郡ベニ襲撃
2005年2月1日	ギャネンドラ国王による直接統治の始まり（ロイヤル・テイクオーバー）
2005年5月	主要7政党が国王の直接統治に反対
2005年9月3日	マオイストが3ヶ月間の一方的停戦宣言
2005年11月17日	マオイストと7政党間の12ポイントの合意
2006年1月2日	停戦破棄。都市部での武装活動。ジャナ・アンドラン
2006年2月8日	国王政府が全国の市で選挙を実施するが投票率は低い
2006年4月6日	七政党による全国ゼネスト
2006年4月14日	国王による対話の呼びかけ
2006年4月21日	最大のデモ。国王、国民に行政権を戻すことを宣言
2006年4月22日	七政党は国王の呼びかけを拒否
2006年4月24日	国王が主権を国民に戻し、下院復活を宣言
2006年4月30日	下院で制憲議会選挙実施を決定
2006年5月18日	国王の特権廃止
2006年11月21日	七政党とマオイストのあいだで和平合意
2006年11月28日	武器を国連の監視下に置くことに合意
2006年12月16日	暫定憲法決定

(Karki 2003，小倉2007などにより作成)

所が攻撃され，警官が死んだ。政府（サルカル）は警察詰め所を撤収して，郡（ジッラ）の首都に集結させた。こうして村村には警察がいなくなった。村はすべてマオイストの占領下になった。彼らはゆっくり自分の組織下においていった。

村人は怯えていた。最初は，ジュムラではマオイストになる者は少なく，カリコットで増えたようだ。自分たちを支持する人間を委員長に据えてコミッティ（人民委員会）を作る，カード（党員証明書）を与える，といったやり方で支持者を増やしていった。マオイストはVDCをふたつ，みっつ併せて，ひとつのエリア委員長を作った。区の人民政府のプラムク（首長）をつくった。ジャナ・プラムク，ジャナ・アダラット（人民裁判所），を作った。ジャナ，すなわち人民と名のつく制度をつくった。政府（サルカル）をプラノ・サッタ（古い体制），自分たちをナヤン・サッタ（新しい体制）という。

最初は少し下層に位置する人間がマオイストになっていった。カミ，ダマイ，サルキといったカーストの出身者，教育のない無学の人間，娘たちも良い夫を持たない者で，村から軽蔑されている者，夫が他の女性（もうひとりの妻）を家に入れているなどなんらかの苦労を強いられて，実家に帰っている者。そのような人間がマオイストになった，最初は。なぜなら，彼らは，金持ちは封建的搾取者（ショシャク・サマンティ）だといって立ち上がったからである。貧乏人は，土地が手にはいるかという私欲でマオイストになった。（しかし）ポッド（地位）のある学のある人間は，マオイストにならなかった。

（マオイストたちは）二人の妻を持つ者，封建的搾取者，酒を飲む者，政治的地位を利用して政府の金を盗む者に罰を加えたり（サザエガルヌ），敵対視する。そうした罰を加えたら，地位（ポッド）をもたない者はポッドが貰えるかと思い，二流の人間がマオイストになった。ネパール・コングレス党の人間にも，そのようなことを良いことかのように感じて，自分達も行くべきかと迷い始めた者もいる。皆が（マオイストに）なった後でなろうとしても，遅れをとってしまうという思惑から。ほかにも踊りに行っり，カルチュラル・プログラムに参加してマオイストになった。そうしたプログラムは若者を惹きつけるために行われていた。

コミュニストは村にやってくると，はじめは丁寧な物言いで話す。「我々に食事をくれませんか。どんな食事であってもかまいません。犬に与えるものであっても，我々に特別に良い食事をくれる必要はありません。我々はあなた方の仕事をしにきました。…我々は人民のために闘っています」と言っていた。

人々も当初はマオイストはいい仕事をしていると言っていた。例えば，酒を飲むこと，賭博をすることを禁じるなど。

サルカルが警察を撤収してからは，村はすべてマオイストの占領下になった。VDCの書記やVDCの仕事はすべて安全ではなくなった。ただヘルスポストは閉鎖にならなかった。これは彼らにも必要だから。

（村にやってきた）コミュニストはのちに，まずは封建的搾取者を略奪した。その後は少し富んでいる者も略奪するようになった。VDCの委員長や委員たちは，家を略奪され，全員生き延びるために，逃げ出した。彼らはさらに橋を壊す，寺を破壊する，サルカルの建物に火をつける，書類に火をつける（といった破壊行為をした）。人々にプジャ（礼拝）や葬式（クリヤ）をすることを許さない。

マオイストたちはカーストに基づく差別の撤廃や宗教儀礼の廃止など文化的なイデオロギーを村人に教えこむ一方に，武装して警察への攻撃，封建的搾取者とみなす人々への攻撃を展開していったことが読み取れる。

本稿では，ジュムラならびにその近隣の，いわゆる地方の政党員たちが，どのようにマオイストから略奪や拷問を受けたか，本人の語りによって再構成する。その際マオイストは襲撃をどのように位置付けていたのかに着目する。また国家は被害者にどのような救済措置をとったのかを検討する。さらに，人民戦争が収束し，新国家体制が構築されつつある現在，避難した人々の帰還の可能性，および村落社会レベルでの対立する勢力間の和解の可能性を探る。

2．最初の被害者：「サワパッティ（議長）」

ジュムラ，シジャ地域でマオイストの最初の攻撃を受けたのはH村のPBである。2055年ジェット月13日夜9時のことである。彼は，もともとムッキャの家柄出身であり，パンチャヤット時代から村落レベルのみならず郡レベルでの重職も務めてきた。その家はVDCの事務所としても使われていた。今日多くの人から名前でなくサワパッティ（「議長」）と呼ばれるのは，ネパール・コングレス党の地方委員会の議長として影響力をふるってきたうえに，郡パンチャヤットの議長（Jilla Pancayat Sabhapati）も務めたことがあるからである[7]。またもとタルの家柄として，地方で中央政府の行政をになうとともに，司法的役割も果たし，人々のあいだの争いの仲裁や解決にもあたってきた。主に土地所有の管理や租税徴収をになってきた。CDOや警察との癒着も大きい。直接には，与党コングレス党として，SP（Superintendant of Police），DSP（Deputy Superintendant of Police）のスパイ的役目をはたし，地域内で誰がマオイストと接触しているか，助けているかを警察に内通していたと思われる。

ムッキャ一般に対し，「その父が犯した罪も子供があがなわなければならない」という批判的言辞を聞くことがあるが，長年にわたって地域社会のボスとして人々を支配してきたがゆえに，ドゥッカ（苦しめられた）と感じている人も少なくない。祖先や父親が誰かを苦しめたとしたら，その子供が罰を受けるという，ヒンドゥーの価値観に基づいた格言ではあるが，これはマオイストによるムッキャ襲撃を暗に肯定し，支持する見方ではある。

PBは襲撃時に60000ルピーの寄付（チャンダ）を要求され，1週間後叔父のDHが50000ルピー与えたといわれる。このことを本人は明言していない。寄付を与えなかったので，今日まで彼の家や土地はマオイストの占拠下にあるともいわれる。主な被害額は，銃60000～65000ルピー，刀剣5000～10000ルピー，望遠鏡30000～50000ルピーという。

PBが襲撃・略奪された理由として他の人々があげるのは，①ネパール・コングレスのサワパッティ（議長）である　②SP，DSP（警察）のスパイとして誰がマオイストかを密告していた　③ムッキャの家柄　④父祖の代から搾取者（ショシャク）であるという4点である。

PBはビスタピット（国内避難民）として，現在，ネパールガンジの町で妻や息子夫婦・孫と暮らしている。収入はないというが，政府から貰った10ラック[8]（と推定される）補償金で，2階建ての美しい家を建てて住んでいる。避難後，ジュムラの村の自宅はマオイストの事務所にされ，所有地も取り上げられ，マオイストが収穫物を得ている。当人の語る受難は以下の通り。

事例1．サワパッティPBの受難

ジュムラ・ジッラの最初の事件（ガタナ）は私に対するものであった。その頃ほかにどこにも起こっていなかった。カリコットでは起こっていた。ジュムラに今日やって来る，明日やって来る，という噂はあった。しかし，誰にも事件は起こっていなかった。（しかも，私の家の近くには）カナカスンダリ寺院のそばに駐屯する警察官が60-65人はいた。

その日はジュムラ（郡庁所在地のカランガバザールを指す）から，CDO，SP，DSPが全員来ていた。（援助物資の）穀物を保管する倉庫の開所式が開かれる予定であった。開所式参加予定者は全員，警察詰め所（チョウキ）に泊まった。その夜，マオイストたちは襲撃（アクラマン）する計画であった。四方からシジャに来るカリキュラムであった，ムグ，ジュムラ，カタヤル，ジャジャルコットから。その日，私の村では外出禁止になっていた。私たちは見ていないし，聞いた話のみだが，（村に入ってきた襲撃者のなかに）シジャのマオイストはいなかった。村の外にはいたらしい。村中に外出禁止令をだした。マオイストたちはCDOたちが泊まった場所から警察が来るかと，橋に爆弾を仕掛け，銃を構えていた。2055年ジェット月13日夜9時のことであった。私は寝床に横になってはいたが，寝入ってはいなかった。2階に休んでいた。マオイストが来るのではと思っていた。マオイストが来たら殺してやろうと，銃を用意していた。長い刀剣もあった。望遠鏡もあった。ひどく古く，シジャパッティのラジャ（王）の時代のもの。結局，そうした武器は役に立たなかった。家の周囲から多くの人間の足音が聞こえてきた。下の家の戸を閉めた。近隣の家の戸を閉めた。私も部屋の戸も閉めた。戸を開けろ，開けろという声が聞こえた。私の死期がやって来た。どうしょう，どうしょう。今日の日までとなった，生きるのは。

息子のひとりが2階の反対側の部屋に寝ていた。私はひとりで寝ていた。（妻と息子ひとりとはカランガバザールへ行っていた。）母屋の1階の部屋に2人の（息子の）嫁たちが寝ていた。

私は戸を開ける気がしなかった。もう死ぬように死ぬしかない。一度に8～10人が棒で戸を叩いた。それだけ叩けば戸は耐えられなかった。壊れて中側へ折れた。部屋の中は暗かった。「銃を出せ，銃を出せ」。マオイストが，彼には銃がある，刀剣がある，と言っていた。私は何も言わなかった。私には二連発銃があった。電燈はつけなかった。電線はあったが，マオイストが電線も切断してしまった。その後，懐中電灯をつけた。マオイストは銃と刀剣を見た。そして，マオイストは銃を手にした。私は怖くなった。銃で撃つのか，刀剣で斬るのか。銃を捕まえると，4発の弾があるのが見えた。マオイストが銃を捕まえたので，私も捕まえた。引っ張り合いになった。一つの格言がある。「飛行機が故障すると，飛行機は揺れる。上下に揺れると，ひとは怖がり，シートを捕まえようとする。でも飛行機が墜落すれば，シートを捕まえていても，役に立たない。」

（マオイストはそれまで殴らなかったが，）私が銃を離さないでいると殴った。私は服を着ていなかった。最初ひとりが棒で私の頭を殴った。私は寝床にいた。寝床が血だらけになり，濡れた。死ぬ時期がきたと思い，血は出たが，痛みはなかった。ククリ（刀）で斬られるか，銃で撃たれるか，という恐怖心でいっぱいだった。

息子は足音を聞いて，起きて外へ出てきた。私の部屋へやってきた。父親を殺そうとしているのを見ると，マオイストを2－4度棒で殴った。マオイストは沢山いた。マオイスト7－8人が殴ったので，息子は気を失ってしまった。

10－12人が家のなかにいて，重要な財産（金銭，衣服，什器など）を置いた部屋に入って行った。鉄の金庫があって，財産はそこにあった。下の部屋でも銃を持って来い，持って来いと言っている。

ひとりの嫁は籾を入れる木製の箱のなかに隠れていた。ひとりの嫁は屋根にあがって，「マオイストが舅を殺した」と村人に聞こえるよう，大きな声で叫んだ。村人は我々が助けに行くから納屋に隠れていろと返事した。しかし，家の戸を閉めているのだから，誰も来ることはできない。来るか，来ないか，何も確信はない。しかし，ひとりマチャルという家の婿が，灯明をかざして，「どうした　どうした」と言いながら私の家のほうへやってきた。家の前では，銃を構えた多数のひとが集まっている。「行くことはできない，止まれ」と制止させられた。彼らは四方から，誰も通らせないよう見張っていた。

下の部屋の財産を全部，取って行った。下の人間が上へやってきた。仲間内で話しをしたであろう。何を取った，何をしたということを。その後ひとりのマオイストが頭を下向きにしろと言った。私がどう感じたかと言うと，頭をこうしたら，私の首を斬るのだろうと思った。自分達同士で話をしていた。ひとりに向かって，「グル（先生），グル」と呼びかけていた。そのグルが，袋からとり出して，消毒薬のようなものを私の頭に塗った。

このときもう死なないと安心した。生きられるという欲望がわいてきた。死ななければならないのなら，なぜ消毒薬を塗るのだろう。（その治療してくれた人は）こうやって肩の徽章を見せた。のちある人が言っていた。マオイストの偉い人が来ていたと。私に攻撃した者のなかに地元ジュムラの人間はいな

かった。ロルパやルクムの人間だった。（ある村人によると，地元の人間は家の外にいた。中にいたのはロルパやルクムの人間である。）最近わかったことだが，タトパニ（地名）のDというコマンダーものそのなかにいた。

彼らは「あなたは報復リストに載っている。殺すのではない。殺人リストに載ればあなたを殺していた」と言い，のちチャンダ（寄付）をくれと言った。「私はひとを騙したことはない。だれも殺したことはない。何か取ったこともない。なぜチャンダを与えなければならないのか」と答えた。

「私は5年間DDCの仕事をしてきた。私が取ったり，騙したり，悪事をしているというなら，DDCへ報告しなさい。私に言ってくれ。悪事をしたのなら，チャンダを与える用意がある。そうでなければ与える必要はない。私は誰にも何もしていない。私は郡（ジッラ）の予算（お金や物資）をどうもしていない。きちんと残してきた。他の横領傾向のある人間にも与えていないし，私自身も取っていない」と言った。

上の部屋から「歩け」と言われて，下へ連れていかれた。私は服を着ていなかった。下の部屋に連れていき，わたしを縛った。下の部屋に行ってみると，あらゆる財産がなくなっていた。嫁もそこに来ることはできなかった。部屋の中には家族のだれもいない。金庫を掻き回している。財産を全部取っている。帳面や本も散らかっている。書類を取っていっている。最後にマオイストたちは私の家の家財を取っていった。略奪し，殴った。「誰にも言うな。言えば，お前の命はなくなる。我々はもうお前に何もしない」と，最後の言葉を言った。マオイストたちは外に出て，家に鍵をかけた。外から鍵をかけ，（去っていく）足音がした。

その後，彼らは父方の叔父DHの家へ行った。まず私に報復（カルバイ）をし，その次にDHの家へ行った。彼はカトマンズへ行っていた。彼の弟SHに会った。価値あるいい物は，DHがすでに隠していた。略奪は無駄であった。書類は置いてあった。SHの部屋に入り，殴打した。殺そうとした。彼のもとには，グチチョウという（薬草）きのこ5kgと，水牛を購入するために貯めた13000ルピーの現金と取り上げた。私から取り上げた書類と，DHの家の書類とをあわせて火をつけた。炎は大きく上がった。「マオバディ・ジンダーバード（マオイスト万歳）々」と叫んだ。自分達の（襲撃の）カリキュラムが成功したと，3－4度空砲を鳴らした。その銃は，私から取ったものか，彼らが自分でもってきたものか，わからない…

ナラ（ほら貝）を鳴らした。空砲を鳴らした。CDO，DSPに聞かせるため。それを聞いてサワパッティは殺されたと，CDOやDSPは思いこんだという。

翌日，警察は私の家へやってきて，「我々は（助けに）来るはずだった。CDOやDSPが来させてくれなかった」と説明した。CDOたちは警察に，「自分達を置いて行くな，マオイストに殺される」と言ったらしい。朝3－4時までカルバイ（報復）をした。空砲を鳴らして，グループの多くはカタヤルの方へ逃げた。

（今ではマオイストがどのように攻撃を準備したかすることができる。）事前に，地元の労働者農民党（マドゥルキサン・パーティ）とマオイストとは会合を開いていた。彼らはO村から略奪しにやってきて，略奪したら，O村へ行った。O村にはたくさんのマドゥル（キサン党）がいた。

それは初めての事件（ガタナ）であるので，マオイストの作戦会議があった。のち，労働者農民党は先頭にたつことができなかった。O村の人間が私の家へ来て，犬がいる，銃がある，サワパッティはここで寝ているということを調べて，すべての話をマオイストに教えた。私の家を略奪する日，O村のRの家でご飯を炊いて，カシ[9]を斬って，飲食して，夜，ハットシジャに来たのである。

私はこのことをR（ネパールコングレス党員）に訊いた。「なぜ私に何も言わなかったのか」「わたしは知らなかった。軍隊のような服を着ていた。どこへ行くのか，何をするのか，何も言わなかった。私はカシを与え，米を与えた。彼らはそれを食べた。略奪するということは知らなかった。」

あるB村の人間は，PBに近い人間だが，水路の見張り番に立った。Rの家と，水路とは同じ場所にある。B村の人間はRの家へ行った，食事をしに。Rのイスタミトラなので。Rは「あなたはここにいない方がよい。上の村へ行きなさい。」と言った。だから，この人間はこのことを私に言った。「秘密のミーティングがあるらしい。」と。

あるPという若者が「おまえは上へ行け。我々はここでミーティングがある。」と言った。Rの息子が一人いる。その息子はは間接的にマオイストになっている。

パタンから私の馬を連れてくる計画（カリキュラム）があった。Pが行った。Pはのちにマオイスト

のプラムクになった。パタンから私の14頭の馬を連れてきた。馬は他にもいたが，他のひとの馬は連れてこなかった。パーティから命令があったのだ。私のだけ連れてくるようにと。

カリコットのマオイストがおまえはここに住むことはできないと言った。2－3日後に，ヘリコプターが来た。ヘリコプターでカトマンズに行った。（なぜヘリコプターで行くことになったかというと）警察の人間は私の家が略奪されたとき，来ることができなかった。銃を発砲する音を聞き，ほら貝を鳴らすのを聞いた。サワパッティをマオイストが殺したと言って，彼らのウォーキー・トーキーからジュムラへ連絡した。ジュムラからはカトマンズへラジオで放送した。新聞は全部，PBは死んだという記事を載せた。カトマンズに住む友人達は，この知らせは本当か否かジュムラに訊ねた。他の友達にも尋ねた。死んではいないと言うと，ヘリコプターを送るという話になったのである。

略奪が終わると，村の人間が見にやって来た。私がそのとき泣いたりしたら，周囲はすべてを略奪されたとひどく動揺したことだろう（実際には泣き叫んだりはしなかった）。皆は，「ははあ，本当だ。ドゥッカを被っている」と言ったに違いない。私はそうしなかった。彼はそれほど損失を被らなかったと村人は思った。夜があけると，警察がやって来た。私は腹が立った，警察を見ると。「お前はなぜ来たのだ。死体を見にやって来たのか。わたしは死んではいない。」「向こう岸でCDO，DSPは見ていた（が，マオイストが）他の者に来ることを許さなかった。橋に爆弾を仕掛けているかと，来ることができなった」と言って警察は去っていった。警察が去ると，DSPやCDOたちがやって来た。彼らに雑言を浴びせた。「あなたたちは国の平和を守るのが役目なのに，この様か。あなたたちが（遠く離れた）ジュムラにいるのなら，私はどうも思わない。私の家の前まで来て泊まっていながら，何もすることができないとは。」

彼らは家を全部見，写真も取った。「議長（サワパッティ）は我々と話をする意思がない。彼はとても動揺している。」すべてを記録して，インスペクター一人置いて行ってしまった。私はそのインスペクターの顔を見る気もしなかった。「あいつら泥棒は国の財産を全部取った，全部だめにした」と胸中で考えた。

援助米の倉庫の開所式にCDOたちが行っていた。そこから警察がやって来た。「行ってください。行ってください。ヘリコプターが来た，カトマンズから」。しかし，その日はヘリコプターは来なかった。翌日，来ると言って，警察がやって来た。馬に乗って，ヘリコプターまで行った。そこからカトマンズへ行った。体のここからここまで殴打されていた。2ヶ月治療した。数日，歩くことができなかった。

カトマンズからジュムラへ帰ると，マオイストが増大していた。もう住むことはできないと思って出てきた。マオイストが送り出したのではない。自分の考えでここネパールガンジに来て住んでいるのである。ただ住んでいるうちに月日が経った。

最初は，カリコットのマオイストたちがイン・チャージになって，我々の郡（ジッラ）にやって来た。カリコットのマオイストは2－3ヶ月滞在し，ある金品を取った。そのひとは去った。他の人間が来た。他の人間も財を取ると行った。こうしてジュムラの財産を彼らが取ってしまったのである。

VDCのイス，卓を略奪して，私の家を彼らの事務所にした。もっと間違いを犯した人（叔父のDHを指す），もっと他のひとのお金をだまし取った人，そのようなひとのもとへは再びやって来ない。私は標的になった。DHは自分ではジュムラ・バザールに住んでいる。息子を家に置いている。マオイストと協力関係を作り上げている。家にカリコットのマオイストがやって来る。息子が飲食を与える。もてなし，喜ばせている。私の家には（家族は）だれもいない。サイダンティック（他の人にドゥッカを与えない，自分の家に住み，他の人に媚び諂わない）な人間をネパールではだれも顧みない。

のち，マオイストたちがやって来て，私の家の土地（ジャガ，ジャミン）を彼らの管理下に置いた。家をイラカ（地方）イン・チャージの事務所にした。りんごが実る時期には，庭のりんごを全部取って食べていた。

あるDDCの委員が何かのライセンス料を支払わないというので，マオイストに捕まった。マオイストは捕まえると，彼を私の家（すなわち事務所）へ連れてきた。そのDDC委員は言っていた。「サワパッティがいるときも行っていたが，今は，マオイストたちが家をのっとっている。私は胸が痛む」と。

私の家を事務所にしたので，ひとを捕まえて，そのひとを家に連れてくる。私の土地はマオイストが接収し，村中のひとを田植えや，刈り取りに使っている。籾や麦はマオイストが取り，土地の収穫はマオイストのものになった。今日はマオイストの田植

えがあるというと，近隣の人間は田植えをしに行かねばならない。6－7年マオイストが収穫物を得ている。マオイストは今年から土地は放棄したが，家は手放していない。

2．若きVDC委員長が受けた拷問

カリコット出身の，もとVDC委員長DB（38歳）は，NC党員である。現在，ビスタピットとなって，ネパールガンジで商売をしながら生計をたてている。彼の家が略奪されたのは，上述のH村のPBと同じ時期である。PBの家は13日に略奪されたが，彼の家は4日後の17日に略奪された，2055年ジェット月のことである。

彼はタクリ・カースト出身で，コングレス・パーティで積極的に活動してきた。彼を懲らしめれば，この地域の民衆は我々になびくと計算して，マオイストは彼に報復（カルバイ）をしたと，他の党員は見ている。マオイストとは彼はそれ以前出会ったことはなかった。

事例2．コングレス党員ＤＢが受けた拷問

以前にマオイストに会っていれば逃走していたはず。私が身体的報復，金銭的報復をされるとわかっていれば，（隠れるとか）その用意をしていただろう。2052年にはルクム，ロルパ，ジャジャルコット，サリヤンでだけ（マオイストの動きを）聞いていた。我々のほうにはなかった。のちゆっくり2053年，2054年にカリコットまで来た。2055年ジェット月13日PB（「サワパッティ」）の家が略奪された。マオイストは彼に報復した（カルバイ）。銃を奪い，書類を奪った。サワパッティゆえ，家財はたくさんあった。

14日に食糧倉庫の開所式があった。11のVDCの人間がそこに集まった。当時の大臣のひとりも開所式にやって来た。ヘリコプターが食糧を運んできた，それを倉庫内に運んだ。昼間，カリキュラムが行われた。夕闇が迫ると，CDOなどが泊まれというので，そこへ泊まった。15日ひき返して家に戻った。CDOや大臣などが我が家で食事をしにきた。カシを殺し，食事をもてなした。写真も取った。15日に彼らを送り出した。

私の家の上方にもうひとつの村がある。そこの村の人間が私を呼びにきた。私はその村へ行った。その村に行かなかったら，その夜に私に報復（カルバイ）をしたのではないだろうか。私たちの田に水を運ぶよう水路を作って，17日夕方5－6時に家へ帰った。家族は全員揃っていて，食事をした。

私の家はふたつある。上方の家には弟の家族が寝ていた。下方の家には私の家族が寝る。昼間はなにも気づかなかった。夜，12時30分頃，足で戸を蹴り上げる音がした。戸は内側から，鉄の棒をつっかえにしていた。その戸が内側に開いた。私は眠気が覚めた。「誰だ」というと，「我々はマオイストである」と言う。

私の知っているひとではなかった。懐中電燈で照らされた。暗かった。彼らは懐中電燈をわれわれの目にあてた。自分の顔にはあてない。知っている人か否かわからなかった。私は起きて戸口まで行った。彼らは私を銃床で殴ろうとした。私はその銃を捕まえた。引っ張り合いになった。彼らはそとへ引っ張る。私は内へ引っ張る。私の考えでは，強く引いて手を離せば，彼らは後ろにひっくり返るだろうということであった。4人いた。壁に足をかけて引っ張った。私が手を離して彼らがひっくり返ったら，逃げようと思った。私は銃を引っ張りに引っ張った。後ろにいたマオイストがククリ（刀）を抜いて，頭の真中を打ち据えた。そして私は倒れた。二人が私に銃のねらいをつけた。他のが鍵を要求して，籾，現金，衣類など全部を盗った。グッチチョウ（きのこ）が1クィンタルあった。インドに持って行って売れば，10－12ラック手に入っていたはず。それも盗った。ククリで殴られ，なにもすることができなかった。他の人間は立ち去った。行ってから15－20分後に戻ってきた。起こして，手足をつかんで，他の部屋へ連れて行った。家族（妻），小さい子供は泣き，叫んだ。家族や子供を殴った。縛って部屋のなかへ投げこんだ。そして，戸を閉めてしまった。

私をどこへ運ぶかと相談していた。のちほかの部屋へ連れて行った。向こうの部屋へ寝かせた。4人が両手両足を押さえ，一人が胸のうえに乗った。ひざに乗った男が袋から釘と金槌（ハンマー）を取り出した。膝に釘をさしかけた。釘を打つ，揺らす，抜く，を両膝に5回ずつ。痛くて叫んだ。もがいた。彼らは「もっともがけ」といって釘を打つ。のち私は気を失った。釘を打ち，抜く，釘を打ち，抜く…。どうやら死んだようだと，私を放棄した。私をうつぶせにして去っていった。空砲を撃って去っていった。

村の人間で助けてくれる者はひとりもいなかった。兄弟も来ることができなかった。村中の家が戸を閉めてなかにいた。

マオイストはだれに報復するか決めると，まずその地域を占拠して外出禁止令をだす。報復が済んだ

ら，銃を撃ち，全員を集める。空砲を鳴らして，我々のカリキュラムは成功したと，全員を集めて去る。

マオイストが空砲を鳴らして行った後，「死んだ」と言って，家族（妻）が来，兄弟たちが来た。村人が来た。彼らは戸を開けた。私を探した。部屋のなかは血だらけだった。ヘルスポストへ行って，薬を塗った。止血するために傷口に綿をあてがった。血は止まった。18日にローカルドクターが来て，薬を塗ってくれた。18日に郡庁に連絡が行った。19日朝8時にヘリコプターが来た。最初，医師が包帯をして，私を木の台に寝せた。木の台ごとヘリコプターのなかに乗せられ，ネパールガンジに連れて来られた。保健大臣，クル・バハドール・グルンがネパールガンジに来た。ネパールガンジでは治療することができず，カトマンズへ行った。翌日朝7時にカトマンズへ着いた。ビル・ホスピタルに入院した。怪我は治癒した。一ヶ月入院した。18日間，ホテルに泊まった，治療に通うため。その治療費はわたしが払う必要はなかった。政府（サルカル）が払ってくれた。友達が来て，泊まったり食べたりしたのを私が払った。のちよくなった。どこも痛まない。しかし，しゃがむと傷口が痛む。額には傷跡が残った。そのときから再び家へ行くことはできない。

2056年から家へ行ってはいない。私の家の土地は彼らが占領した。もう7－8年経つ。兄弟も家族もそこにはいない。家や土地はマオイストが営んでいる。兄弟は4人いる。私は部屋代を払ってネパールガンジで暮らしている。兄弟たちも同様にして暮らしている。

村に行ったとしも，友達は誰もいない。村にいるのは，満足はしていないが，金がなくて仕方なくいる者のみ。自分のイデオロギーに基づいて，反対することができる者，彼らに意見を言うことができる者，開発の仕事をすることができる者などはいない。マオイストたちの行いは不正義である，誤り（ガルティ）であるということが出来る者はパハール（丘陵地）にはいない。そのような者はインドへ行き，カトマンズ，ダン，バルディヤに行っている。もともとそのような土地に家を建てていた人は，そこで暮らすことができる。私には今家を建てることはできない。今は，息子や娘を養い，鉛筆，ノートや学費をまかなう（学校に行かせる）こと，家族を養うはできる。それ以上のことはできない。

私になぜマオイストはカルバイをしたのかというと，略奪するとき，つぎのように言った。「おまえはNCの柱のよう（に重要）な人間である。おまえの膝に釘を打つ」。釘を打たれるとき，私は痛かった。なぜ釘をさすと叫んだ。マオイストは「お前はNCの柱…」と繰り返した。

私のVDCには悪い考えをする者がいた。道を歩く者，ベラ，バクラをパハールからスルケット，ダイレクに連れていく，米，塩を運ぶ者，ネパールガンジからスルケット，ダイレクから衣服や布，石鹸，砂糖，ビスケット，などの荷を運んでジュムラ，フムラ，に行く者，夜，彼らが宿泊するところで荷を盗む。盗んだり，奪ったり，必要のない喧嘩をする，無学な輩が。

私は少し学があったので，こんなことをしてはならない，盗んだり強奪するのはよくないことだと言った。勉強しなくてはならない。商売をして儲けなくてはならない。政治活動をしなくてはならない。こんなことを村のひとに言っていた。

ある一人を殴るとなると，村中の人間が行く。あちこち村中が棒を担いで。そんなことをしてはならないと言った。

昔，村人と大きな喧嘩をした。BS2048年に喧嘩をした。BS2049年に選挙があって，私はVDCの議長に選ばれた。再びBS2054年にVDCの議長になった。合計10年くらい委員長の仕事をした。他に理由はない。政治の理由からである。

シジャには警察署（タナ）があった。カリカケットゥに警察詰め所（チョウキ），カレリにチョウキがあった。それらチョウキを引き上げたら，カリコットやジュムラの境であるから，カリコットにたくさんいたマオイストは仕事がしやすくなった。

後わかったことだが，私の家を略奪するとき，300メートルくらいのところにある警察詰め所（チョウキ）の人間にマオイストは警告を与えていた。「おまえたちは来るな。詰め所の外へでたら，おまえたちを全滅にする」と言っていた。

DDC委員のBH，DDCの書記SBなど，彼らは恐怖で逃げ出した。郵便配達夫のMBの家族も恐怖で逃げ出し，ジュムラ・バザールで暮らしていた。昨今は家に戻って暮らしている。

今，マオイストたちは私に家に戻れと言っている。我々は彼らを信頼しない。彼らは，我々の信頼を取りもどさなければならない。私のチェトラに住むマオイストがネパールガンジに私を訪ねて来た。私のネパールガンジの店にやってきた。会って話をした。私に帰らねばならぬという。「私は帰らない」と言っ

た。

「わたしは村でアニヤ（不正）をしただろうか。悪事をしただろうか。もししたというなら，全部のリストを作ってくれ。私がどんな間違いをしたか示してほしい。わたしは間違いを正すから。お金を取っていれば返そう。わたしは間違いも違反（アパラッド）もしていない。なぜ報復したのか。マオイストは報復という間違いをしたと言って許しを請わなければならない。わたしには26人の家族がある。わたしはひどく困っている，食事や住居に。私の家や土地はどこにあるのか。わたしのスラッブ（祟り），涙が憑く，あなたに。マオイストは自分の間違いに気づくか，（そうでなければ）私の間違いを示してほしい。われわれは村へ戻ったら，ものを言うことができなければならない。あなたたちは何もしてはならない。あなたたちがした間違い，不正義，違反（アパラッド）を見ると，ものを言いたくなる。言えば，喧嘩になる。また，お前たちは3日後にわたしに報復することになる。そんなところへどうして戻ろう。また3日内にネパールガンジに戻らなければならなくなる」と答えた。

マオバディは「あなた，あそこへ行ったら（村へ帰ったら），我々の命令に服従して住まなければならない」と言う。マオイストは，あるRPPのプラダンパンチャに15ヶ月間，家に蟄居して遠くへ行くなというサザエ（罰）を与えたこともある。

我々は家に戻ったら，食べ物が必要だ。ジュムラでは一年に一毛作である。我々は作物（バリ）を植えていない。なにを食べる。その食べ物の世話は，マオイストがするのか，政府（サルカリ）がするのか。私には，ジュムラから来るとき着ていた物以外，手元には何もない。ジュムラに帰るとき何もない。どうやって食べ，どうやって住むのか。

マオイストも上層の幹部は物分りがよい。村のマオイストは幹部が言うとおりにはしない。下層部と上層部とで言うことが食い違う。下層の人間は，寄付を集めたり報復することをやめていない。

マオイストたちは，パハリの村の正直で愚直な民衆にとてもドゥッカ（苦しみ）を与えた。何をしたかということは村に行けば知ることができる。あなたのようなひとが行けば，あそこの人間は苦しみに胸を焼かれて涙を流すことだろう。でも，その村の人間は苦しみを隠さなければならない。そんなことを言ったということを知ったら，マオイストはあなたにカルバイ（報復）をするだろう。

「ロルパ，ルクム，ジャジャルコットから光りながらカリコットへ」といわれるように，マオイストは道路，橋，つり橋，政府の建物，すべてを爆破した。学校はあるが，他の政府の建物はまったくない。学校はあるが，生徒たちは学習することはできない。今日は，マオイストのカリキュラムへ行け，文化カリキュラムへ行け，彼らの建物を作りに行け，バサン（スピーチ）を聞きに行け，ジャナバディ・シッチャ（人民教育）を学びに行かなければならない（と動員される）。

政府（サルカル）はどれだけのひとに（補償）を払うことができるだろうか。初めのほうの人（＝被害者）は補償を得た。あとの人は何も貰えない。私には2ラックくらいくれただろう。それが何の役に立つだろう。

わたしが学校の生徒だった頃，2036年にパンチャヤットか民主主義かを問う国民投票が行われた。黄色の票がパンチャヤット支持で，黒の票が民主主義支持だった。そのとき全員が黄色に入れたが，私は入れなかった。26－27人ほど説き伏せて民主主義に投票させた。そこからパンチャヤットの人間とわたしとのあいだで喧嘩が始まった。パンチャヤットの人間がしたことを我々は気に入らなかった。BS2040年民主主義になった。この民主主義を信奉する人間，ビム・プラサッド・シュレスタ（故人），LH，PB，TUなどが，我々の村にやって来た。彼らは私にVDC委員長に立候補するチケットをくれた。私はコミュニストは好きではない。

昨日，ネパールガンジではマオイストの大会があった。学校をすべて閉校（ストライキ）にして，学生たちを大会に連れていった。たいていの学生の名を委員長，副委員長にのせている。コミッティーを作るため。私の息子の名もそこにあげていた。「僕はそのコミッティーには参加しない。僕はネパール・コングレスの人間だ」と息子は言った。まだ6年生である。「僕はマオイストの委員長にはならない。ネパール・コングレスの委員長である」と言う。子供達のあいだにも支持政党が分かれている。

コミュニストのイデオロギーと，ネパールの土地（ブミ），ネパールの人間（ジャンタ），ネパールの風土（ハバ，パニ）とは調和しない。コミュニストの政府ができても，長くはもたない。倒れる。この国にコミュニストの政府ができれば，インド，日本，アメリカ，英国は援助しない。外国が援助を与えてくれなければ，ネパールでは食べる物がない。どの

ように国を運営していくというのだろうか。

土を砕く，鋤で耕す，商いをする，そんなことをしながら，私の生活は政治活動へと向かっていった。

私は世捨て人になっても，4人の子供と妻を捨ててでも政治に携わる。

もし，村に戻すのなら，ビスタピットたちを上手に送り戻さなければならない。三者を集めて，議論して，航空券代，道中の費用も与えなかえればならない。マオイストは彼らに何も危害を加えてはならない。実際のところ，苦しみ（ドゥッカ）を与えられた人間は，戻ってはいない。

政府の方針は，民衆の苦しみを見ず，費用を払わないつもりのようだ。NGOも成功してはいない。NGOたちは緊急時の食器にもなっていない。

バザールの困難と村の困難とは異なる。パハールに住む人間はとても困窮している。そうした困窮はバザールに住む人間にはない。ともあれ，困窮をなくして，ビスタピットたちを家に戻さねばならない。ビスタピットを戻すために，ジュムラ・ジッラの指導者はマオイストを呼んで計画（ヨジャナ）をたてるべき。

マオイストの方針（ニティ）として，郡（ジッラ）から逃げて他の郡（ジッラ）に行き，ビスタピットになった者には再び他の報復はしない。父母は泣くしかない。その家からブミガット（マオイスト）に一人はならなければならないので。

3．辱めと脅し

地方政党員すべてが，マオイストを敵視し，拒絶したわけではない。表面的であれ，マオイストと友好関係を築こうとした者もいる。コングレス党員で旧家から新しく権利を譲り受けてムッキャになったJAはそうした態度を取った。しかし，コングレス党内の仲間からは強い批判を浴びることになった。結局，JAの家もマオイストに略奪され，辱めを受け，村を離れてネパールガンジ近郊に家を建てて家族で暮らしている。

以下，その仲間たちが語るJAの顛末である。

事例3．コングレス党員JAが受けた辱め

一度JAが言った。「指導者（ネタ）であれ，プラダンパンチャであれ，他の者のお金を盗った者が家を略奪される。われわれには何もしない」。そんなことを言った一ヶ月後に，マオイストが来た。JAの家に来て，座った。JAは肉と飯とおいしい物でもてなした。マオイストはそれを食べて，こんなおいしい食事は，誰かから騙し取った者だけが食べられると言って，感謝もせず去った。

「最初にサワパッティの家を略奪しなければならないというのなら，彼らはいまは我々には何もしない。ドシ（過ち）をした人間は逃げた。」とJAは言っていた。我々をドシといった彼の家も略奪され，報復された。マオイストはJAを捕まえて，村のカミ，サルキ，ダマイや女性，小さい人物に，私は過ちをした，許してくださいと言いながら，お辞儀（ドグ）をして，回らせた。我々はそんな不名誉なことはしない。苦労はあるが，むらの外に住んでいるから。

JAはネパールコングレスの人間なのに，マオイストの旗を握って，マオイスト・ジンダーバード（万歳）と言って，一日の道を歩いてララで開催されたマオイストのカリキュラムへ行った。他の機会にも，カランガの近くで大きな大会があった。そのときも彼は参加した。

JAはPBに言ったことがある。「あんたはネパールガンジに住んで何をしているのか。シンジャに行って，寄付（チャンダ）を払って住め」と。実際JAはネパーリコングレスであること，ムッキャであることに対しダンダ（罰金）も払った。1～20000ルピーくらいか。村へ行って，JAは丁寧に歓迎の挨拶をするので，仲間は一度に「マオイストに手を合わすより逃げたほうがましだぞ」と言ったこともある。

我々はマオイストから隠れ，逃げだして住んでいる。苦労しながら住んでいる。我々の家からマオイストになった者はいない。我々はマオイストの旗を掴んで，マオイスト万歳など言ったことはない。我々はネパール・コングレス党員だというイジェット（誇り）を持って住んでいる。

一家が移住後ジュムラに残ったJAのブワリ（息子の嫁）は，マオイストになり，誰の子かわからないが，こどもを産んだ。その息子が言った。「私の妻がマオイストになったのは，父と母の過ち（ガルティ）である」と。家のなかがうまくいっていない。自分達はネパールガンジに住んで，その嫁だけをジュムラの家に残していたのだ。

7年経った。ビスタピットになって家に行かずに。家には誰もいない。一人娘が住んでいる。妻がときどき穀物をとりに行くという。

帰村のため，INSEC[10]は我々に小額の飛行来機代をくれ，ジュムラへ行くと，その人権団体は他の者にも見えるように前後に旗を立てて村まで送る。

JAの息子は人権団体のお金でジュムラへ帰った。

空港へ着いて戻ってきた。その友人も着いて戻ってきた。マオイストたちを呼んで，「彼らに何もしてはならない，自分の家に住まわせる」よう人権団体は言った。言ったことを「わかった，わかった，何もしない」とマオイスト答えたという。

ある金持ちKSを，マオイストの犠牲者（プリット）と言って，人権団体はお金をだして飛行機で送った。そのお金をとJAの息子たちは取ってしまった。自分はビスタピットだと言って，お金を要求した。そしてジュムラに着くと，JAの息子もその友人も自分の家には住まずにネパールガンジに戻ってきた。

コングレス党員として2期VDC委員長に選出されたTUは，サワパッティPBの隣の村に住み，その年若い友人でもある。2期目にDDC委員にも選ばれていたとき，マオイストに家を略奪された。そのとき，たまたま彼は不在であったが，大家族ゆえ，彼の兄と次男，その家族がマオイストに遭遇することになった。

TUは3人兄弟の三男で，他の兄弟は政治には無縁であった。繰り返し略奪されることを恐れ，急いで兄弟間で財産を3等分した。現在，彼はダンに小さな家を建て，妻と末息子とともに住んでいる。ダンの土地は，略奪よりはるか前に，馬の移牧をする長兄が入手していたものである。家の建築費用には略奪の保障として政府から支給された20万ルピーを当てた。

秋の収穫物を手にするため，カランガまで行くことはあるが，次男夫婦が守る村の家には行っていない。

事例4．DDC委員TUの受難

BS2056年，私は一度，家にいた。戸口に座っていた。通り掛かりのひとに「お座りなさい」と声をかけた。そのひとは私を攻撃しに来た当人であった。逃げ出した。マグシル月のことである。走って，上の山へ隠れた。二人の男が「ククリを貰いに来た」と言った。マイラ（次兄）に，「弟をどこへやったか言え」と言った。私の長男がククリを渡した。長男と一緒にマオイスト3人がククリを持って，立ち去った。村外れの学校で，任務が終了したしるしに10人が銃を鳴らした。

村人は，マオイストがどんなカリキュラムをする場合も一緒に行く。警察署を襲撃するときも，すべての村人を連れて行く。警察が撃って，村人が死ねば，サルカルを非難する。われわれの人間を殺したと，政府が批判されるようになる。

長男を連れていっていれば私が川向こうの警察まで行ったとしても，なにかあっても，マオイストの手元には人質がいることになる。

私は山に隠れて，人をやって，家にマオイストがいないことを確認してもらった。家に着くと，自分が服も着ていないことに気づいた。そのときから，家で寝ないようにした。夕方6時から朝9時まで一人一人，村の信頼おけるひとの家にいた。9時になると食事をしに家へ戻り，犬を放す。1－2人の人間が外に座って見張りをする。夜はどこで寝るか定めなかった。いろないろなところに行くようにした。

のちに私はカランガに住み，時々家に戻るときは，警察に報告してから戻った。その理由は，私はDDC委員になっている，ネパールコングレスの人間である。誰がマオイストかを警察に通報したと言って，立腹する。我々は，最初，彼らのことを一大事のように思わなかった。私だけが間違ったわけではなく，政府の人間もそのように思っていた。警察が捕まえればそれで終わりのように考えていた。村の人間もそのように考えていた。あらゆる人間が警察に報告・密告していた。この村のこの人間はマオイストである，と。一大事だと思っていなかった。その頃，彼らは何もすることができなかった。のち，大きな組織を作り上げた。村人すべてを取り込み，警察署を襲撃したり，家を襲撃したりすると，什器，金銀を自分のものにする。穀物は，食べ物が足りない人間に，「おまえが担げるだけ持っていけ。おまえが食べろ」と与えた。夜なら村人はそれが誰か知らないうえ，食べ物も手に入るので，大きな袋を用意して担ぐ。なかに入って家から取り出すのはマオイスト，外で担ぐのは村人。このようにすれば，村人も食べ物が手に入る。内内に彼ら相互の協力ができる。

ひとつの家が略奪される。翌日，別の家が…。彼らの関係が深くなる。彼らの文化カリキュラムや会合の，門（ドッカ）を作りに行かなければ，罰金（ジャリマナ）として100-200ルピー支払わねばならない。払わなければ殴打されるか，懲らしめを受ける。そのようにするので，村人は逃げ出してインドへ行くか，住み続けるならばマオイストのいうことに従わなければならない。女性もカリキュラムに参加しなければならない。すべての人間が。

チャイトウ・ダサインを祝うために，私は隣のL村の妹の家へ招かれた。途中，小学校のところで，崖のほうに銃を構えたマオイスト兵がいると，村の子供が教えてくれた。そこを避けて，異なる道をた

どって，妹の家へ行き，10分ほど座って，自宅へ急いで戻った。G村の上方でマオイスト兵が警察署に向けて発砲していた。友人たちが，ここにいては危険だと言うので，カランガへ逃げた。

それは我々の家が略奪される2－3日前のことである。私は家を離れ，朝4時に起きて歩いた。ジュムラに着いたのは，11時だった。翌日，マオイストはナラコットでカリキュラムを行い，4-500人が銃を構えて集まった。そこに警察署があったが，誰かがそこに発砲して，警察が近寄らないようにした。

その後チャイトラ月の23日夜に家へマオイストがやってきた。そのとき家にいたのは，次男とその妻，兄とその妻，幼子であった。別々の部屋で寝ていた。兄の家に入って，無言でまず殴打した。その後コングレスの批判をした。「お金を出せ」「お金は自分のところにはない。甥のところにあるだろう」。私の次男がないというと，ククリで腕を切る脅しをかけたという。そこで，次男はNGOの預り金15000から20000ルピーを差し出した。

マオイストは，衣服や什器，穀物を家から運び出した。書類などは外へ出して燃やした。陶器のティー・カップなどは外に放り投げるので割れてしまった。

マオイストが何人いたかは不明。知っている人もいたかもしれないが，全員覆面をしていた。家財は家の外の一定地に運び出し，そこで担げるように荷をつくって村人などに担がせて運んだ。どこへ持っていったかも不明。

略奪を終えると，寝姿で裸同然の家族を外に出し，家に火をつけるので，兄弟などの家があれば，そこへ行け，家畜は外へ出せと言った。兄が「行くところはない。我々が死ねば家畜の世話をする人もないので，ともに殺されたほうがまし」と答えると，火をつけずに立ち去った。

略奪のあいだ，周囲の村人は自分の家から外にでることはできなかった，夜8時頃まで。その後，やってきて，着る物など当座必要な物を与えてくれた。私はカランガにいたが，この話を伝え聞いて，次男を警察署の電話口に呼び出して被害状況を聞いた。翌日，DSP，CDO，警察が被害調査に家にやってきたという。

しばらく後，シジャのチョウキ（警察署）は閉鎖され，道中の襲撃を恐れて，警察はヘリコプターでカランガに移動してきた。

4．国王の巡幸と襲撃

ここに取り上げるのは比較的新しい略奪事件で，ラストリヤ・プラジャタントラ党(RPP)員としてカリコットのDDC委員長に3選されたDBの事例である。かれがマオイストに略奪されたのは，2005年キャネンドラ国王がカリコットを巡幸する際の歓迎委員長を務めたからであるという。巡幸を阻止しようとするマオイストは，国軍とピリ(Pili)で戦闘を行った。

DBは現在，ネパールガンジでホテル暮らしをしている。

事例5．国王の巡幸がもたらした戦闘

最初，私は選挙で勝った。そのとき（マオイストは）私に何もしなかった。寄付（チャンダ）も要求しなかった。のち，私は（選挙ではなく）指名されて郡議会議長となった，スルジャ・バハドール・タパが首相のとき（2003年6月6日就任）。

国王の地方巡幸（ジッラ・バルマン）の折には，その地方が国王のサワリを準備・実行しなければならない。カリコット郡に国王を行かせまいと，マオイストと国軍とが9日間闘った。のちマオイストは負けた。負けた後にはじめて国王のサワリがあった。

損害は大きかった。マオイストがたくさん死亡した。その戦いの仕事を郡議会議長の私がしたのである。コトワダというところに，マオイストの拠点があった。それを国軍が木っ端微塵にした。BS2061年ファグン月のことである。

最初にカリコットにサワリがあるということだったのに，最後になってしまった。国王が来たとき，マオイストが国王を狙撃する計画であった。このことを国軍が知って，戦闘が始まった。9日間食べるものも食べず，闘った。ヘリコプターから食べ物を投下した。その後，私に戦争の責任がきた。サワリ・サミッティの委員長となった。国王歓迎のカリキュラムでは，カリキュラムの委員長となった。そのおかげで，家を略奪（ghar lutne）されることとなった。ある50ラック相当の水路建設プログラムがあった。水路を作る材料を運んで置いていた。それも略奪された。その後はカリコットに行っていない。行くのはやめた。

大家族なので，（家族ごとに）食事は別にしていた。他のことは一緒に暮らす。書類などはわたしがする。弟が住む家のものは取らなかった。私が住む家のを取った。母家は私の家である。すべてはそこにあった。現金もなかった。金もなかった。金は一つの鼻飾りと，

一つの首飾りがあった。議長になって，衣服や布をたくさん集めていた。ドルパから4枚の絨毯をもってきていた。それはヤクの毛からつくったもの。

Q.　家は倒壊したのか。

A.　家は倒壊はしなかった。窓や戸は持っていった。2061年のチャイトラ月のこと。私の土地は小作にだしている。今日までその小作料は小作人からマオイストが取っている。りんごもマオイストが取っている。1～1.5ラック相当。

Q.　今マオイストはあなたの家に住んでいるのか。

A.　最初は住んでいた。昨今はどうだろう。家は高台にあって，村全体を見渡せる。道を歩く人も見える。偵察するのによい。私の家からトンネルを掘ってジャングルに抜けるようにした。

2052年か2053年頃，ネパール・コングレスの議長だったNBの土地をマオイストが占有した。今ようやくひとつの水田を植えることができたと聞いた。家は古い物だろう。倒壊しただろう。戸など全部取っていったと聞いた。彼の弟たちを見つけていたら，殺していただろう。彼は昔から金持ち。少々，他人を苦しめ，塩辛い性格。我々は決して他人に命令するようなことはないのに，こんなことをされた。

Q.　家を略奪されたとき家にいたのか。

A.　家にいなかった.家族もいなかった。いなかった理由は以下のとおり。

高等学校に勤める甥（次兄の息子）がいて，MAをパスして教諭をしていた。とても聡明だった。わたしのあとをついで政治の道に進むと思われた。マオイストが2058年に殺した。理由はというと，アッチャムでマオイストが蜂起（アカルマン）した。マンガルセンでも襲撃した。そこからマオイストたちは戦いながら，カリコットまでやってきた。

国軍は教諭を殴った。わたしはカトマンズにいた。教諭たちをマオイストだろうといいながら，国軍が殴った。

死んだ弟は下宿に住んでいた。学校にはマオイストが落書きをしていた。その下宿をしていた甥は，落書きを消そうとしていた。国軍はこれはまさしくマオイストだと思いこんだ。「おまえはマオイストだろう。われわれが来たのを見て，消そうとしている」と言って殴った。

ひとりマオイストの青年がいた，学校に。国軍は彼を殺した。自分も殺されるだろうと，落書きを消した甥も逃走した。穴の中に隠れた。国軍は外に10－12個の爆弾を仕掛けて，その穴を粉塵にしてしまった。死んだと思って立ち去った。

その日，私のVDCで7人が死んだ。ほかにバルタという村で6人が死んだ。13人が死んだのである。その後逃げ出した。私の甥も逃げ出した。

Q.　13人はマオイストか，ふつうのひとか。

A.　マオイストといえばマオイストである。そこから逃げてDHQに行った，甥は穴のなかに2日間隠れていた。DHQに行くと，DHQの国軍が言った，「アッチャムの国軍は事情を知らずに殺そうとしたのである，我々は電話をしよう。あなたは家に戻りなさい」と言って家に戻した。諭して一週間後に戻った。私もカトマンズから家に戻った。「どうした，こちらへ来い」と甥を呼んだ。

甥には何か試験があった。甥を家へ呼んで話しをするつもりであった。甥は「私は試験があるので，試験が終わったら来ます」と言った。19日に試験が済んで，マオイストたちは彼を19日に拉致し，24日に殺した。その後，我々は家へいっていない。

こうして14人が殺されると，村人たちはその地域を放棄した。逃げてインドへ行った。誰もが思い思いのところへ逃げて行った。地下に潜っていた，もうひとりの甥が3日後にやって来た。私の家の人間が逃がして，アッチャムへ連れて行き，アッチャムからカリコットのDHQへ連れてきた。ある者はスルケットへ送り，ある者はカトマンズへ行った。残りはDHQに住んだ。牛や水牛は放棄し，その後は行っていない。

マオイストに不満を持っている，村人は。村人は怒っている。恐怖で「はい，はい」と言っているが…。今（2006年夏），カリコットでは村人がマオイストを殴りかけている。戦争がなくなったら，村で大きな争いになるだろう。

（マオイストは）民衆に必要のないドゥッカを与えた。（村人の）食糧を食べた。カリコットの人間をフムラへ連れていき，フムラの人間をカリコットへ連れて来た。民衆へドゥッカを与えた。喜んでマオイストになったひとは楽しいだろう。（しかし）他の者は楽しくない。

彼らは攻撃しなければならないときには，民衆を先頭に据える。自分たちは後ろに立つ。民衆を盾にする。死ぬときには，民衆が死ぬ。勝つときには，自分たちが勝つ。ふつうの村人が死んでも，我々の人間（マオイスト）と言う。

私は戦争のとき（2005年8月5日と思われる），DHQにいた，ピリの戦いのとき。ネパール国軍はピリのベースキャンプに着いていなかった。マオイストの

軍はカリコットにすでに来ていた。彼らはDHQを射撃することはできず，コトワダに駐屯する国軍を攻撃した。コトワダとピリを攻撃した。「あなたがたは，今，国軍をピリに連れていかないでくれ」と国軍の人間に言った。国軍が言ったことは「奴らがやってこなくてはならない。来たら，我々がやっつけてやる。」私は国軍に言った，「あまり空威張りしないでください。」国軍はマオイストといろいろなところで闘って，勝っていた。だから勝てると思っていたのだ。「わたしはカトマンズに行く。カトマンズでも言うが，あなた方，どうか国軍をピリまで連れていかないでくれ。コトワダというところに，軍を増強しなさい。コルティというところに軍を増強しなさい」と私は言った。

私はカトマンズへ行き，内務大臣に会った。「マオイストの軍がカリコットに来ている。1000人の軍をコトワダとコルティに増強しなければならない」と言った。ダルバルのほうにもこの旨を伝えた。私が言ったことは信用されなかった。

国軍はマオイストの軍隊はどこが弱いか，そこを攻撃する。国軍の半分はヘリコプターでやって来た。半分は上流から。昼間，戦闘が開始した，ピリで。そこのヘリコプターが着陸する場所には，誰もいなかった。そこをマオイストが占拠した。国軍を殺した。上方にいた国軍を殺した。国軍の装備を略奪した。

国軍は5-60人死んだ。マオイスト側は700人は死んだ。800-900人かもしれない。

5．政府による補償

政府が国内避難民にどのように対応したか，詳細にレポートされているのは，人権擁護団体INSECの機関紙Informalに掲載されたGnyawali(2005)の論文である。以下，ほぼこれに基づいて要約してみる。

最初に，ネパール政府は1999年9月「ガネッシュ・マン・シン・ピース・キャンペーン」のもと，国内避難民に支払う日当を決めた。このキャンペーンは，3人家族に一人あたり一日100ルピーを供給することを目指していた。もし，家族が3人以上なら，2人につき100ルピー与えるというものだった。1999年に決定されたが，実際に支払いがなされたのは，2001/02予算年度であった。かなりの数の国内避難民を抱える，多くの地域はなんの基金も受け取らなかった。お金のほとんどは，2002年の7月までに使われた。このことは，日当は1年以上は支給されなかったということである。

2003年2月までに，1507万ルピーが内務省のもとでさまざまな地域の国内避難民に分配された。2001/02年に422万ルピー，2002/03年に1085万ルピー。2004年10月までに，2610億が国内避難民の日当とほかの救済パッケージにキャンペーンのもとで使われた。しかし，でたらめな分配により，国内避難民のほとんどに届かなかった。同様に，体系的な支払いの記録も存在しない。実施に向けた調整もない。

政府は，「紛争の犠牲者ファンド」を立ち上げ，2001年7月に「ガネッシュ・マン・キャンペーン」のもと，10億ルピーの分配を始めた。基金の目指すところは，紛争の犠牲者の財政的，教育的，医療的援助である。しかし，基金は多くの人が指摘するように，国内避難民に特化したものではなかった。

2002年，政府は「即時救済プログラム」を作りだした。18の地方の，200人の女性に無利子の5000ルピーのローンと1000人の孤児に教育マテリアルを供給すること，子供ひとりに一ヶ月，食事，シェルター，教育のため，1000ルピーを，女性，子供と社会福祉省から与えることが目的であった。同様に，紛争の影響を受けた25人の女性へ，技能訓練は労働省からもたらされる予定であった。さらに，政府は545避難民家族から，一人ずつを外国での雇用のために派遣すると発表した。

2003年，政府は紛争犠牲者援助というより広いカテゴリーで「国内避難民リハビリテーション・プログラム」を発表した。50000万ルピーが援助に予算配分されたが，それが実際に支払われたか否か不明である。同様に政府は，2004年に「犠牲者への即時弁済と救済」の基金を発表した。さらに5000万ルピーを計上したが，それは定義とカバーする地域に問題を抱えていた。2004年政府により発表された次のパッケージは，「15ポイントの救済パッケイジ」であった。それは，国内避難民へのワーク・プランを含む救済パッケイジ準備のためのタスク・フォースによって提出されたプロポーザルと同一で，2004年10月1日の閣議で承認された。そのパッケージは国内避難民の子弟が公立学校で無料の中等教育を受けるための一ヶ月の費用と教育マテリアルとのため1000ルピーをもたらすものであった。同様に，60歳以上の避難民に一ヶ月300ルピーと，避難し病院で治療を受けるために必要な支援として最大5000ルピーを与えることがそのパッケージに含まれていた。それは，国内避難民の女性に所得を増やす訓練も含んでいた。

しかし，これらの分配は政府のいうところによると，国内避難民のためになされたが，現実は異なっている。これらのファンドは国内避難民のためだけでなく，マオイストによって殺された市民の扶養家族や治安関係

者の家族への弁償を覆うものであった。ほかに，失われた財産，紛争犠牲者の治療の補償にも使われた。

ほとんどすべてのプログラムは，2004年まで，機能しなかった。2004年に形成されたタスクフォースは，外国での雇用を例外として，他のプログラムは国内避難民のために機能しなかった。国内避難民の海外での雇用プログラムについても，組織的な方法で，実施されたわけではない。国内避難民の狭い定義（マオイストの活動ゆえ村を離れ，他の場所や地域へ移動した等）ゆえ，これらのプログラムは問題に訴えるものではなかった。2002年8月CDOへ発した5ポイントのガイドラインに表れているように，政府は「国内避難民」をマオイストによって移動させられた者のみを含み，政府の治安部隊によって移動させられた者を排除して定義している。

最近2005年7月，避難した市民への障壁のない基本的公共サービスの享受，国内避難民への職業訓練，影響を受けた子供への保護と発展のためのメカニスム，公共建設作業への労働に国内避難民を優先する，登録した避難民への地代を免除し，海外での雇用へのローンを提供するという発表をした。しかし，政府はこの援助の合計額はいくらか，言及しなった。実施はプログラムの発表の最初から疑問があるという事実をあきらかにした。

政府の基金やプログラムは，国内避難民の問題を解決するのに成功した結果をもたらしていない。国内避難民への対応は，差別的で，方向性を欠いている，不充分で，時には存在していないとさえ批判される。マオイストの暴力のあきらかな被害者という限定された基準を満たしたひとも，何ら補償を受けとっていないと不満をもらしている。配当金は本当の国内避難民のところに届かず，地方のDHQの政治家とコネのある者や役人，近くて気に入った者に届いた。それは二つの帰結をもたらした。(a) 国内避難民のほとんどは援助から排除されている。(b) 多くは政府筋に登録しようと思わない。同様に，郡庁からの証明書を義務づけることは，国内避難民のほとんどが政府の配当金やほかの援助を受け取る資格をもつことを認めないことである。

三つの大きな弱点があって，これらのプログラムは国内避難民を惹きつけるのに失敗している。第一，明確なプランがない。第二に，これらはとても希薄で，緊急の援助を必要とするひとを満たすことはできない。最後に，受け取り手を同定し，分配された資源を利用するためのマネジメントが非常に貧しい。政府によって採用された援助プロセスは，科学的とはいえない。国内避難民は単に受身的受けとり手としてとり扱われるだけで，活動的な権利主体としては扱われない。

Martinez(2002)も，犠牲者のための政府の基金は，政治的とリンクしており，コネのある政治家や，役人，そのクライアントが「普通の市民」より恩恵を受けていると指摘している。さらに，CDOによって準備された報告書には治安部隊による犠牲者は含まれていないので，この種の犠牲者は政府の資金にアクセスする可能性はないと判断されるとしている。

政府によって作られた特別基金は次の通り。

1）紛争の犠牲者基金：次の三つの範疇の人々が恩恵を受けることができる。
　死亡した役人（警察と軍隊）の家族。各家族に10から15万ルピー。
　負傷した人々。負傷した公務員と戦闘員の入院費用と治療費を負担する。
　IDP(国内難民)。一日につき一人あたり100ルピーを支給（一家族3人まで）。

2）奨学金プログラム：紛争で死亡したひとの直系家族を援助する。小学校から修士課程までの学生へ年間1万から2万ルピー支給。

3）私有財産損害基金：内務省によって直接に運営されており，財産が破壊された場合，現金の援助が受けられる。その請求は，被害額が確認された後，CDOによって承認されなければならないので，その手続きには数ヶ月を要する。紛争地帯で情報を証明することが不可能なため拒絶されることもある。政治的にコネのある人々のみがこれらの資金にアクセスできた。

6．結びにかえて

本稿に取り上げたガル・ルトネの被害者たちは，他の国内避難民と違って，政府からの補償を充分に享受している。まず，破壊・略奪された家財[11]に対し，私有財産損害基金から2～10ラック相当の金額を入手している。「サワパッティ」の事例を見ても，実際の被害額の10倍くらいの補償金を入手している。難民として，家とは別の地に住まねばならないことに対し，ひとりあたり100ルピーの日当を，貰える期限いっぱい貰ったというのも事実である。

マオイストは，地方名望家への暴力行為をカルバイ(報復)と位置づけている。地方名望家たちはマオイストを警察に密告しただけでなく，地位を利用してジャンタ(人民)のサンパティ(財産)を取りあげ，政府の資

金を横領したショシャク・サマンティ(封建的搾取者)というわけである。殺害リストに載っていれば殺害するが，そうでなければ，多少の殴打でチャンダ(寄付)を要求する。名望家は相当のチャンダを払えば，自宅に住むことは可能である。また，他の郡に逃げ出せば，そこで報復されることはない。しかし，どちらにしても政治家としての影響力を発揮することは出来ない[12]。

注釈

1）国内避難民(IDP)には多様なひとが含まれる。Banerjeeは，国内避難民を，富裕な政治的IDPと若者・貧困層との大きくふたつのグループに分けている。富裕な政治的IDPには，選挙された代表も含めNC支持者が多いと指摘している[Banerjee 2005:248]。
2）地方自治法には，村落開発委員会法，市開発委員会法ならびに郡開発委員会法がある。
3）1992年時点での自治体数は，村3995，都市町36，郡75であった[井上1993：361]。5年毎に20万人の代表を選ぶことになる[Khanal2005：135]。
4）1997年の改正で，ひとつの区に，議長1名と委員3名が置かれるようになった。
5）ロルパ，ルクムを指す。
6）人民軍の組織は，下部からスカッド(Squads)，プラトーン(Platoon)，カンパニィ(Companies)，バタリオン(Battalion)となっている[Sharma2004：57]。まず最初に作られたのはスカッドである。
7）村レベルのネパーリ・コングレスのリーダーの3分の1はもとパンチャで，90年民主化時に入党した者である[Hachhethu 2002:97]。
8）1ラックは10万ルピーである。
9）去勢した山羊。
10）人権擁護団体Informal Sector Service Centreの略。
11）私有財産の損害の総額は5億8099万ルピーにのぼる[Dhakal2006：130]。
12）名望家の帰村には村における土地改革が必要と思われるが，まだ十分に検討されているわけではない。[Upadhyay2006：27]。

文献

Adhikari, Bipin 2003. The Context of Conflict and Human Rights Violations in Nepal: Some Preliminary Observations in Bipin Adhikari (ed.) *Conflict, Human Rights & Peace Challenges Before Nepal.* Kathmandu: National Human Rights Commission.

Banerjee, Paula 2005. 'IDP in Nepal' in Banerjee, P. (ed.) *Internal Displacement in South Asia.* Sage Publications Inc.

Dahal, Puspa Kamal (Prachanda) 2003. 'Inside the Revolution in Nepal' in Arjun Karki and David Seddon (ed.) *The People's War in Nepal: Left Perspectives.* Delhi: Adroit Publishers.

Dhakal, Dilli Raman 2006. *A Decade of Disaster: Human and Physical Cost of Nepal Conflict 1996-2005.* Kathmandu: Community Study and Welfare Centre (CSWS).

Gnyawali, Prakash 2005. State of Statelessness: A Critical Observation on Government Responsibility for Conflict-induced IDPs in Nepal. *Informal* Special Issue on IDPs, vol.19, No.2&3.

Hachhethu, Krishna 2002. *Party Building in Nepal: Organization, Leadership and People.* Kathmandu: Mandala Book Point.

Karki, Arjun 2003. *Whose War?* Kathmandu: NGO Federation of Nepal.

Karki, A. and D. Seddon 2003. 'The People's War in Historieal Context.' in Arjun Karki and David Seddon (ed.) *The People's War in Nepal: Left Perspectives.* Delhi: Adroit Publishers.

Khanal, Krishna P. 2005 'Elections and Government' in Lok Raj Baral (ed.) *Electionand Government in Nepal.* New Dheli:Manohar.

Martinez, Esperanza 2002. *Conflict-Related Displacement, Nepal.*

Pant, Shartra Dutta 1997. *District Administration in Nepal.* Baglung: Piyurani Publication.

Sharma, Sudheer 2004. 'The Maoist Movement: An Evolutionary Perspective' in Michael Hutt (ed.) *Himalayan People's War.* Bloomington: Indiana University Press.

Thapa, Deepak 2003. *A Kingdom Under Siege: Nepal's Maoist Insurgency, 1996 to 2003.* Kathmandu: The Printhouse.

Upadhyay, Ujjwal 2006. *Insurgency Affected People of Nepal: Rehabilitation.* Kathamndu: Institute for Integrated Developement.

井上恭子　1993「ネパールの地方制度」地方自治協会編『アジア諸国の地方制度』地方自治協会所収

小倉清子　2007『ネパール王制解体　国王と民衆の確執が生んだマオイスト』日本放送出版協会